

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01293

研究課題名(和文) 研究者ネットワークによる巨大災害被災地での歴史文化環境再生の研究

研究課題名(英文) The studies about the support for resilience of historical and cultural surroundings in the 3.11 disaster area with scholar's networks

研究代表者

佐藤 大介 (Sato, Daisuke)

東北大学・災害科学国際研究所・准教授

研究者番号：50374872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：1、伊勢松坂商人で、江戸深川を拠点としていた海産物商・湯浅屋(小津)与右衛門家の当主であった小津久足が、個人として商家当主、文学者、蔵書家および文化人としての動向を、それぞれの社会状況とともに明らかにすることで、「近世的」自我をもった個人としての有り様を明らかにした。2、小津久足による近世紀行文の代表作「陸奥日記」などを活用して、東日本大震災被災地の一つである茨城県における18～19世紀の歴史文化環境を再生した。3、天保時代から明治初年の仙台藩領の商家に残された約60万文字におよぶ商家日誌を公刊し、天保飢饉や戊辰戦争など災害・紛争時の庶民社会の状況を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1、小津久足の研究からは、江戸時代の日本に生きた一人の商人が、身分制を原則とする社会の中で、個人が名称を使い分けることで近世的自我を確立したこと、生業と風流を両立させることで心身の健康を保つことなど、江戸時代の社会・文化的蓄積に基づく「あり得た近代」の姿が示された。2、小津久足の紀行文「陸奥日記」のような、外部者が特定の地域に訪れてその様子を叙述した記録を活用することで、東日本大震災などの災害や、社会的な変化によって失われた歴史文化的環境の再生に資することができることを明らかにした。3、市民との長期的な連携活動により仙台藩の未解読史料を公刊し、学術さらに地域の歴史文化再生の基盤を整備できた。

研究成果の概要(英文)：1, Hisatari Ozu, an Ise-Matsusaka merchant and head of the Yuasaya (Ozu) Yoemon family, a marine products merchant based in Fukagawa, Edo (present-day Tokyo), was an individual who had an "early modern" sense of self. 2, Using the Mutsu Diary by Hisatari Ozu, a masterpiece of early modern writing, we revitalized the historical and cultural environment of Ibaraki Prefecture, one of the areas affected by the Great East Japan Earthquake, from the 18th to 19th centuries. 3, We published approximately 600,000 letters in the journals of merchant families of the Sendai domain from the Tenpo Period to the early Meiji Period, and studied disasters such as the Tenpo famine and the Boshin War, and the history of the merchants. The journals were published to elucidate the social conditions of the common people at the time of disasters and conflicts such as the Tenpo famine and the Boshin War.

研究分野：日本近世史

キーワード：歴史文化の再生 学際連携 歴史文化資料の保全 ネットワーク形成 地域連携

1. 研究開始当初の背景

一般に文献史学においては、研究対象とするテーマに関する史料が「完全体」で残されていることはほぼ想定されていない。現存する史料からの情報を基に、解釈によって歴史像を提示している。ある地域に関する歴史を明らかにする際、特に流通史や旅行史といった、ある地域 A と他の地域 B との交流自体を分析しようとする場合、地域 A に残された史料だけではなく、地域 B に現存する地域 A に関連する文献史料を分析することが必然となる。この事は、地域 A の歴史を明らかにする事に加え、そのことを通じて地域 B の歴史資料の新たな意義を再発見し、地域 B の歴史像の見直しにもつながっていく。歴史情報の交換、それに伴う地域間関係の創出、個別地域の歴史の再構築という点は、文献史学の研究者が持っている職能である。ただし、そのことがあまりに当然視されているためか、個別研究の方法という点を超え、特に社会との関わりの中で、自覚的かつ組織的に実践されることは少ない。

一方、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災以降、日本列島では多くの自然災害により、地域に残された文献史料が失われている。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、申請者および本研究の協力者が、相互に連携しつつ被災した史料を救済しているが、沿岸部を中心に無数の歴史資料、さらには「3.11」直前までの記憶を伝える資料が失われる状況にもなった。これらの被災地では、考古時代、および「3.11」時点で生存していた住民が継承する伝承、および「3.11」後の記憶のみが「歴史」とされ、その間に地域の風土を形作ってきた経緯が、一切存在しなかったことにされる危機に瀕している。

このような状況においては、地域 A の外に所在する歴史記録を組織的に探索し、被災各地がつかってきた歴史環境の復元に資する情報を集積する必要がある。そのことは単独の研究者でなし得ることではなく、地域内外でネットワークを構築し、被災地・市民社会の知的情報源として共有するための体制を、実践を通じて意識的に行うことが急務である。

2. 研究の目的

巨大災害により既存の歴史資料に決定的な被害を受け、物理的にそれらを失った地域の歴史情報の復元、共有化、地域との共有を、被災地に拠点を置く文系研究者と、被災地外で関連情報を把握する文系研究者が連携して、史料情報共有の組織、技術、地域との対話のあり方について、実際の地域での活動成果を通じて考察する。そのことで、文系研究者固有の職能を通じた災害支援のあり方について提起する。

3. 研究の方法

紀行文を用いた被災地の歴史文化資料再生

本研究は東日本大震災での被災地における歴史文化情報の再生を実践しつつ課題に取り組むことになるが、その有力な情報の一つは、江戸時代に膨大に記された紀行文である。長期の平和、旅行者が安全に移動できる政治社会的な制度の確立、出版物による和漢書の共有などを背景として、江戸時代の人々が自らの旅を記録した日記、さらには文学作品が膨大に残されていた。当然、これらの記録は歴史学、国文学の双方で膨大な研究蓄積を有している。とはいえ、作品を生み出した歴史的背景、歴史環境復元に重視を置く歴史学と、表現や作者の心性を重視する国文学の側が、意識的に連携し、作品の分析、さらにはその成果を関係地域の歴史文化環境の復元に意識的に実践した例は少ない。

東日本大震災被災地の歴史再生において、特に宮城県以南では紀行文の活用が有用な方法である。江戸時代の日本列島において屈指の名所であった松島(宮城県松島町)を旅程に入れた記録が膨大に残されているからである。その行程には、宮城県、福島県、茨城県の沿岸が含まれている場合がある。これらの地域は、津波被災などで歴史文化的史料を大量に失った上、被災後の大規模土木工事、原発事故に伴い、歴史文化的景観の大幅な変容、消滅の危機に目下直面している。日本史学・国文学の方法論を融合させ、厳密な文献解釈と当時の歴史環境、現在の状況を比較することで、歴史環境の復元と共に、災害後の地域の変容について記録できる。

情報記録を活用した被災地の歴史文化資料再生

江戸時代の特色の一つが、外交関係が限定された状況下において、日本列島全域を結ぶ経済圏が形成されたことである。自然環境・気象状況の影響を受けやすい、米や農林資源の加工品、水産加工品に基盤を置いた経済が発展する中で、市場や自然状況に関する情報を記録した史料が膨大に現存している。経営の維持発展に直接関連するがゆえに、関係する地域の情報は、基礎的事項にまで場合があり、時として対象地域の史料では知り得なかった未知の政治・社会・経済に関する情報が含まれている。

これらの内容もまた、江戸時代の社会、経済史を分析するための研究素材として活用されてきた。しかし、被災して歴史記録を失った地域の史料として活用するためには、地名・人名の厳密な比定、関連史跡の確認、地元関係者との連携が必須であり、個別の研究活動を越えたネットワークによる分析が必須である。本研究では、商家の情報史料を素材に、個別・単独の内容分析にとどまらず、その過程を通じて関係地域間のネットワークを構築し、歴史情報を共有するための

環境整備の課題について検討する。

4. 研究成果

小津久足の個人史に関する研究（菱岡 2023）

小津久足（1804～58）は、伊勢松坂の商人で、江戸深川に拠点を置いて、干鰯などの取引を行っていた富商・湯浅屋与右衛門家の当主であった。それと同時に、本居門下で国学を学び、追って自らの多様な文化的交流をへて、独自の文芸活動を展開していった。また、自らの生業で得た資産を元手に構築した蔵書家としての側面も持っていた。

それぞれの活動に際しては、生業では屋号の「湯浅屋与右衛門」および通称の小津新蔵（のち与右衛門）を名乗った。国学・和歌・紀行文の営みでは、実名の「久足」を用いることにこだわっていた。本居宣長の子・春庭に学んで国学の研鑽に励み、その中で詠歌と紀行文の執筆を行っていたが、国学からは離れてゆく。一方で国学で身につけた和歌や紀行文には熱心に取り組み、生涯で七万首の和歌と四十六点の紀行文を残した。

蔵書や文人間の交流では号の桂窓を名乗り、蔵書や蔵幅を中心とした書齋にまつわる文事、滝沢馬琴や蔵書仲間ら文人たちとの交流に好んでその名を用いた。これらのことは、江戸時代が身分制社会である一方、様々な制度や実態によって流動的な側面も持っていた。建前を守りながら柔軟な社会生活を営むため、名称をつかいわけていたのである。江戸時代人にとっては、そのすべてが「本当の自分」であり、複数の「本当の自分」を生きていた。

久足は、裕福な商人であることが自らの文事を支えていることを十分に理解しつつも、その両者の調和を図ろうとしていた。そのことは、伊勢商人としての家を存続するため、財産を守りつつも増殖を求めて逆に持続可能性を危うくすることのないよう、節度ある蔵書や文事といった「遊び」に余剰を投じるという態度であった。富商としての境遇を享受する久足は、世の中を警戒しながら持続可能性を目指し、うまくいっているものは変える必要がないという保守主義を徹底し、そのから自己の身上を危うくするものはしりぞける合理主義を生む。「守り」のために「遊び」を校訂し、家の維持に努めながら「一己」を肯定する久足の文事は、前近代社会を商人・小津与右衛門として生きたことと表裏一体であった。

紀行文を利用した地域の歴史再生に関する研究（添田編 2023）

小津久足の紀行文「陸奥日記」は、天保11年（1840）春、江戸深川から陸奥松島までの往復の旅行を素材とした紀行文である。江戸時代の制度に支えられて旅行が活発化し、文字文化の普及と合わせて武士・庶民を問わず旅日記や紀行文が多く作られた時代における「代表作」として評価する見解もある。客観的な風景描写と、批評性に富んだ叙述がその所以である。

本研究期間では、茨城県域において、「陸奥日記」や、県内外に所在する関係資料を用いて、江戸時代の歴史文化的環境の再生および地域還元を実践した。「陸奥日記」については、久足が私淑していた江戸時代前期の水戸藩主・徳川光圀の文事との関わりについて明らかにしている（添田 2023）。水戸藩が光圀が生み出した唐様の景勝や建築が織りなす、国際色豊かな風景が広がる地であった。文事については、和漢や身分の違いにこだわらず、史叢の多様性を尊重し、多彩な交流の中で新たな知を想像しようとする学問風土が市井にまで浸透した、久足にとっては理想的な地域性を備えた地であったことがうかがえる。そのことから、「尊王攘夷の地」という単純なイメージにとどまらない、水戸藩の新たな「見え方」を示すことができた。

また、その他の知識人の紀行文からは、水戸藩領は米の実りが豊かな土地であり、領民は礼節に厚く、質朴であると認識されていた。実際の歴史とは別に、それらの状況は徳川光圀の遺沢によるものだとも理解されていたという。これらは、従来は農村荒廃などと評価されてきた水戸藩領の像とは異なる評価であることも明らかにされた（高橋 2023）

天保～幕末期における仙台藩領の庶民史料の公刊（佐藤編 2022、2023）

小津久足「陸奥日記」が目標とした陸奥松島は、仙台藩の領地であった。久足が旅した天保11年（1840）春の仙台領各地は、その4年前にあたる天保7年（1833）夏の大凶作に端を発する飢饉の影響が色濃く残っていたことが描写されている。街道で白骨を目撃したとか、仙台藩が窮民救済のための他領米購入に正貨を使い尽くしたことで、藩札の価値が下落し、インフレが影響を与えていたのである。

磐井郡藤沢町の富商だった丸吉（まるきち）皆川家には、当主が2代にわたって書き記した、原本約2100頁、63万文字におよぶ日誌が残されていた。18世紀後半から19世紀前半の約100年間の仙台藩領、さらには江戸・大坂・京都との関係といった全国各地との関係を通じて、政治・社会・経済に関する情報が豊富に記されている。これらの日誌について、仙台周辺の市民とともに解読作業を続け、本科研費の成果の一部として公刊できた。天保期については、飢饉の対応のために御用金を拠出する一方、村の重立ちとして窮民の救済に当たる様子を明らかに出来た。久足が来訪した前後には、正貨の不足による物価高が藩領全体の経済に影響していたことが記されていた。一方で、正貨不足に苦しむ藩では、身分や苗字帯刀、知行地付与の特権と引替に「御宝国」である磐井郡の富商たちに献金を促していくことになる。丸吉皆川家ではそれに応じつつ

も、武士身分を獲得することは、ついに仙台藩が消滅するまで応じることはなかったのである。

幕末期については、開国の影響が、特に養蚕・生糸や桑葉の爆発的とも言える取引として現れていた。領外との関係も、大坂・京都から横浜へと移り変わっていることがわかる。丸吉皆川家は藩による取引に位置づけられて政治的動揺の中で、仙台藩主への期待感も高まっていたことがうかがえる。

文久2年(1862)に流行した麻疹の中での、仙台藩や民間による医療の実態、治療薬の原料となる薬種の確保に奔走する丸吉皆川家当主の動向や、神社の石橋を潜ることが流行するなどの社会文化的な状況を明らかにした。流行中は猖獗を極め、子供や女性が多くなる一方、流行後の社会の動揺や影響を感じさせる記載が意外にも少ないことが指摘できる。

慶応4年(1868)に勃発した戊辰戦争については、藤沢町は直接戦場とはならなかったが、「奥羽の大国」としての仙台藩への期待と、戦地となった地域の情報に触れつつ、自らの地域が戦場とならなかったことへの安堵や、仙台藩も含めた奥羽諸藩の形勢悪化にともない、新政府軍に対する不信を募らせていく様子が描写されていた。戊辰戦争での敗北にともない、磐井郡は仙台藩から新政府の直轄地へと移り変わってゆく。そのことを「三百年來の国の消滅」として、既存の秩序が崩れ、藩との関係で得ていた様々な特権を失うことを嘆きつつも、その中で徐々に適応し、家を存続させていたのである。

(参考文献)

1、菱岡憲司『大才子 小津久足』(中公選書 2023年)

2、添田仁「小津久足の文事と徳川光圀 「右文」の時代の水戸藩」

3、高橋陽一「他領民が観た水戸藩 常陸の風土と光圀の遺沢」

*2、3は添田仁編『旅人たちが観た水戸藩 旅日記・名所絵を読むー』茨城大学人文社会科学部、2023所収。

4、佐藤大介・青葉山古文書の会編『丸吉皆川家日誌 天保編』(東北大学災害科学国際研究所、2022年)

5、佐藤大介・青葉山古文書の会編『丸吉皆川家日誌 幕末維新編』(東北大学災害科学国際研究所、2023年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井上拓巳	4. 巻 133
2. 論文標題 東廻り航路における出羽国城米輸送の成立	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史	6. 最初と最後の頁 29-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上拓巳	4. 巻 83
2. 論文標題 常陸国平潟湊の仙台藩穀宿と米拝借運動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関東近世史研究	6. 最初と最後の頁 60-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井上拓巳
2. 発表標題 東廻り航路の城米浦役人と城米輸送体制
3. 学会等名 交通史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋陽一
2. 発表標題 石碑と旅人 景勝地松島の歴史的展開をめぐって
3. 学会等名 日本建築学会都市小委員会シンポジウム「旅の媒介装置 物的環境が拓く可能性」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部浩一
2. 発表標題 2019年台風19号被害と福島県での資料保全活動
3. 学会等名 第6回全国史料ネット研究交流集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 佐藤大介・青葉山古文書の会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東北大学災害科学国際研究所	5. 総ページ数 482
3. 書名 丸吉皆川家日誌天保編	

1. 著者名 佐藤大介・青葉山古文書の会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東北大学災害科学国際研究所	5. 総ページ数 649
3. 書名 丸吉皆川家日誌幕末維新編	

1. 著者名 添田仁	4. 発行年 2023年
2. 出版社 茨城大学人文社会科学部	5. 総ページ数 72
3. 書名 旅人たちが観た水戸藩-旅日記・名所絵を読む-	

1. 著者名 菱岡憲司	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 400
3. 書名 大才子 小津久足	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菱岡 憲司 (Hishioka Kenji) (10548720)	山口県立大学・国際文化学部・准教授 (25502)	
研究分担者	坂本 達彦 (Sakamoto Tatsuhiko) (20390750)	國學院大學栃木短期大学・その他部局等・教授 (42202)	
研究分担者	青柳 周一 (Aoyagi Shuichi) (40335162)	滋賀大学・経済学部・教授 (14201)	
研究分担者	高橋 陽一 (Takahashi Yoichi) (40568466)	宮城学院女子大学・学芸学部・准教授 (31307)	
研究分担者	平野 哲也 (Hirano Tetsuya) (50735347)	常磐大学・人間科学部・教授 (32103)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	添田 仁 (Soeda Hitoshi) (60533586)	茨城大学・人文社会科学部・准教授 (12101)	
研究分担者	阿部 浩一 (Abe Koichi) (70599498)	福島大学・行政政策学類・教授 (11601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関